

CTAR・シェーカー法 選択・負荷・再評価シート

成人・専門職向け | 嚥下機能評価・全身状態・施設内手順を優先して個別化する記録用紙 (2026.09)

氏名 / ID :	日付: 年 月 日	評価者:	主病名 / 診断:	
主な嚥下評価: ☐ VFSS ☐ FEES ☐ 臨床評価 ☐ その他: _____				

1. 介入目的と前提

目的: ☐ 舌骨・喉頭の前上方移動を支える ☐ UES 開大を支える ☐ その他: _____

注意: むせ・湿性嘔声などの症状単独で CTAR/シェーカー法の適応を決めず、必要に応じて VFSS/FEES 等を含む嚥下機能評価と合わせて判断します。

2. 方法選択: 姿勢・頸部負担・フォーム・実施可能性で決める

実施姿勢	座位: ☐ 可 ☐ 難	仰臥位: ☐ 可 ☐ 難
頸部負担	頸部痛: ☐ なし ☐ あり	頸部手術・既往: ☐ なし ☐ あり
自覚症状	めまい・吐き気: ☐ なし ☐ あり	呼吸苦: ☐ なし ☐ あり
フォーム	☐ 保持できる ☐ 代償あり	代償: ☐ 肩すくめ ☐ 胸鎖乳突筋優位 ☐ 息こらえ
継続性	自主 / 介助で継続: ☐ 可 ☐ 難	環境・器具の準備: ☐ 可 ☐ 難

今回の選択: ☐ CTAR ☐ シェーカー法 ☐ 今回は見送り ☐ その他: _____

選択理由:

※ CTAR を一律の第一選択とはしません。目的が近い場合も、姿勢・頸部負担・フォーム・実施可能性・継続性を踏まえて選択します。

3. 参考プロトコルと今回の実施量

方法	根拠上の位置づけ						
CTAR	至適用量は未確立。研究では保持時間・反復回数・頻度が異なるため、固定の「標準量」とせず、今回の実施量を下表へ記録します。						
シェーカー法	原法の目標: 仰臥位で 60 秒保持 × 3 回 (各 1 分休息) → 30 回反復。1 日 3 回、6 週間。短縮・段階化した場合は「原法」と区別します。						
方法	抵抗 / 器具	保持(秒)	反復(回)	セット	1日回数	週回数	実施期間 / 備考

RPE (記録用): 開始前 ____ / 10 終了直後 ____ / 10 介助・監視: ☐ 自立 ☐ 見守り ☐ 介助 ☐ その他: _____

4. 実施後の反応・中止 / 見直し

頸部痛	NRS: 開始前 ____ / 10 → 終了後 ____ / 10	自覚症状	☐ なし ☐ めまい ☐ 吐き気 ☐ 呼吸苦 ☐ その他: _____
代償	☐ なし ☐ 肩すくめ ☐ 胸鎖乳突筋優位 ☐ 息こらえ ☐ 頸部屈曲のみ ☐ その他: _____		
対応	☐ 継続 ☐ 休息 ☐ 負荷低減 ☐ 方法変更 ☐ 中止 ☐ 医師 / ST 等へ相談 ☐ その他: _____		

見直し目安: 頸部痛の増悪、めまい・吐き気、呼吸苦、強い代償運動、全身状態の悪化があれば、中止または負荷・方法を見直します。

5. 再評価と次回計画

再評価条件	☐ 同じ姿勢・器具・負荷条件で比較 ☐ 条件変更あり (内容: _____)	
確認した変化	フォーム / 症状 / 嚥下機能評価など: _____	
次回計画	☐ 同量継続 ☐ 負荷変更 ☐ 方法変更 ☐ 中止 / 相談 ☐ その他: _____	次回日: 年 月 日

6. 記録上の注意

本シートは CTAR/シェーカー法の「選択理由・実施条件・反応・再評価」を残す補助資料です。処方量を一律に標準化する目的ではありません。CTAR の至適用量は未確立であり、シェーカー法も原法を完遂できない対象では段階化が必要です。最終判断は個別の嚥下評価、全身状態、主治医・ST 等の方針、施設内手順を優先してください。

主要根拠: Shaker et al. Gastroenterology. 2002;122:1314-1321. / Liu et al. Front Neurol. 2023;13:1109140. / Yoon et al. Dysphagia. 2014;29:243-248.

rehabiliikunblog.com CTAR・シェーカー法 選択・負荷・再評価シート v2